

アクマタリエワ ジャクシルク（新潟大学・日本学術振興会 ※発表申し込み時所属：東京外国語大学）

【要旨】キルギス語には /l/ で始まる接尾辞があり、その初頭の /l/ は有声子音に後続する場合、/d/ に交替する。このことは既に多くの先行研究で指摘されている。しかし、有声子音のうち、特にふるえ音 /r/ に後続する際の /l/ の交替、すなわち /r/ という音連続における /l/ の交替に関しては先行研究間で記述の相違がみられる。本発表はこの /r/ における /l/ の交替を精査し、以下の2つの知見を示すことを目的とする。

- a. 接尾辞側に関して：/r/ における接尾辞初頭の /l/ の交替は、義務的ではなく随意的なものであり、かつ派生接尾辞にのみみられる。
- b. 接尾辞接続先に関して：/r/ における /l/ の交替は随意的であるものの、派生接尾辞 /-llk/ をみる限り、「動词语幹-Ar」が接続先である場合、交替は不活性化する。

### 1. はじめに— /l/ の交替—

キルギス語はトルコ語などが属するチュルク諸語の一つであり、中央アジアに位置するキルギス共和国で主に話されている。同言語は8母音体系（/e, a, ø, o, i, u, y, u/）であり、借用語を考慮しなければ子音として /p, b, t, d, s, z, k, g, tʃ, ɕ, ʃ, m, n, ŋ, l, r, j/ をもつ。同言語では母音調和と呼ばれる母音の順行同化がみられる。便宜上、本稿では母音調和により [i, u, y, u] のいずれかで実現する母音を /l/, [y, u] のいずれかで実現する母音を /U/, [e, a, ø, o] のいずれかで実現する母音を /A/ で表記する。同言語では語幹に種々の接尾辞が接続することで語が派生し屈折する。そして、そのような接尾辞が接続する際に、接尾辞初頭の子音の交替がみられることがある。例えば同言語には /l/ で始まる接尾辞があり、その初頭の /l/ は子音に後続する場合、/d/ または /t/ に交替する。例として以下の (1) に複数形接尾辞 /-lAr/ の交替を示す。

#### (1) 複数形接尾辞 /-lAr/ の /l/ の交替

	直前の分節音	例	/l/ の実現
子音	a. 接近音 /j/	後述 ((2) 下、注 1)	
	b. ふるえ音 /r/	後述、本発表での主対象	
	c. 側面音	rol- <u>ɗ</u> or “役”	/d/
	d. 鼻音	mugalim- <u>ɗ</u> er “先生”	/d/
	e. 有声阻害音	køz- <u>ɗ</u> or “目”	/d/
	f. 無声阻害音	konok- <u>t</u> or “客”	/t/ ([-voiced] の同化)
	(g. 母音)	too- <u>l</u> or “山”	/l/ (交替せず)

このような /l/ の交替があることは既に多くの先行研究で指摘されている。しかし、(1) で網掛けを施した接近音 /j/ とふるえ音 /r/ のうち、特にふるえ音 /r/ に後続する際の /l/ の交替、すなわち /r/ という音連続における /l/ の交替に関しては以下の (2) に示すように先行研究間で細かい記述の相違がみられる。また、多くの先行研究は複数形接尾辞 /-lAr/ を主に扱っており、(3) に示す他の /l/ 始まりの接尾辞は詳しく扱っていない。

(2) /r/ 連続における /l/ の交替に関する先行研究の記述

先行研究	記述
① Hebert and Poppe (1964: 18)、 Kasymova et. al. (1991: 101)	・ /-lAr/ にのみ言及。/l/ は有声子音に後続した場合 /d/ に交替する。 (特記などないことから、この「有声子音」には /r/ も含まれていると読み取れる。なお、/r/ における交替の具体例はない。)
② Landmann (2011: 5)	・ /-lAr/ にのみ言及。/r/ の /l/ は交替しない。
③ Kara (2008: 15)	・ /-lAr/ の /l/ は交替しないが、それ以外の接尾辞の /l/ は交替する。
④ Zhu (2018: 469-470)	・ /-lAr/ では交替しない。                      ・ /-llk/ では交替する。 ・ /-lA/ では交替した形式としていない形式の両方が確認される。
⑤ Kirchner (1998: 346)	・ 接尾辞初頭の /l/ 全般に関して、直前が有声子音の場合 /l/ は /d/ に交替する。しかし、/r/ では交替しない形式も時々好まれる (sometimes preferred.) 。

注1: /j/ における交替に関して Hebert and Poppe (1964: 18) と Kasymova et. al. (1991: 101) と Kirchner (1998: 346) は /r/ と同じ記述をしている。また Kara (2008: 15), Landmann (2011: 5), Zhu (2018: 469) はいずれも /j/ では /l/ は交替しないと述べている。

注2: このように記述が異なる要因として、各先行研究が別々の方言を扱ったため、というのが考えられる。しかし、Zhu (2018) 以外は文法概説書の性格が強く正書法への言及もある。このことからそのどれもが地域方言ではなく一般的、かつ標準的なキルギス語を扱う方針のもと刊行されたと考えられる。また Zhu (2018: 468) は自身のデータは Hebert and Poppe (1964) に基づくと述べていることから、両者のデータは同じものということになる。これらのことから方言の差異により記述に相違が生じたとは考えにくい。さらに、庄垣内 (1988: 1421) にはキルギス国内の方言には音韻面にそう大きな違いはみられないという記述もある。

(3) /-lAr/ 以外の /l/ 始まりの接尾辞 (4 種類)、以下の例では下線部が当該の接尾辞である。なお、発表者の知る限りでは (1c-g) の環境におけるこれらの /l/ の振る舞いは /-lAr/ と同じである。

a. /-lAʃ/ 同族名詞派生接尾辞: 名詞に接続し、“同じ～の者” という意味の名詞の派生を担う。

例 sanaa “考え” → 派生: sanaa-laʃ “同じ考えの者 (共感者)”

ajul “村” → 派生: ajul-daʃ “同じ村の者”

b. /-llk/ 名詞形容詞派生接尾辞: 名詞、形容詞に接続し抽象名詞、形容詞の派生を担う。

例 ene “母” → 派生: ene-lik “母であること (母性)”

akim “行政者” → 派生: akim-dik “行政の、行政局”

c. /-IUU/ 形容詞派生接尾辞: 名詞に接続し形容詞の派生を担う。

例 baa “価値” → 派生: baa-luu “価値のある (高価な)”

dʒuulduz “星” → 派生: dʒuulduz-duu “星のある”

d. /-lA/ 動詞派生接尾辞: 名詞に接続し動詞語幹の派生を担う。

例 dʒaza “罰” → 派生: dʒaza-la “罰する”

ak “白” → 派生: ak-ta “白くする”

注3: /-lAr/ は基本的に (3a-d) の接尾辞に後接する接続順をとる。(3a, b, c) については /sanaa-lAʃ-lAr/ “共感者たち”、/of-llk-lAr/ “オシュ (地名) 出身の者たち” /aktʃa-IUU-lAr/ “お金をもつ者たち” のように直接接続可能である ((3c) では名詞へのゼロ品詞転換が生じている)。(3d) については /dʒaza-lA-gAn-lAr/ “罰した者たち” のように分詞接尾辞 (-gAn) による品詞転換を通して後

接しうる。この順序が逆になっている例としてコンサルタント A 氏（後述）からは /ɖɯlduz-lAr-IUU/ [ɖɯlduz-dar-duu] “複数の星のある” という語例が一つ示されたが、他の話者ではこれを認める者はなく、また A 氏もこれ以外の /-lAr-IUU/ を含む語例は認めないとのことだった。

本研究ではこの /r/ における /l/ の交替の実態を明らかにするため、(3) の 4 つの接尾辞と /-lAr/、すなわち計 5 つの接尾辞を対象とした調査を行った。その結果得られた知見は以下の 2 つである。

- (4) a. 接尾辞側に関して : /r/ における接尾辞初頭の /l/ の交替は、義務的ではなく随意的なものであり、かつ派生接尾辞にのみみられる。  
 b. 接尾辞接続先に関して : /r/ における /l/ の交替は随意的であるものの、派生接尾辞 /-lIk/ をみ限り、「動词语幹-Ar」が接続先である場合、交替は不活性化する。

以下、本研究で行った具体的な調査内容について述べる。

## 2. 調査 1—接尾辞の種類と交替の有無に関して—

調査票作成にはキルギス語-英語辞書である Krippes (1998) を用いた。Krippes (1998) では語幹に (3) の接尾辞 a. /-lAɣ/, b. /-lIk/, c. /-IUU/, d. /-lA/ のいずれかが接続したの見出し語としていくつか掲載されている。そして /r/ で終わる語幹では異なり語数で 70 の語幹に上記 4 つの接尾辞のいずれかが接続した形が見出し語として掲載されていた。以下の (5) にその見出し語の一部を示す。(5) からわかるように、表記上 /-lIk, -IUU, -lA/ では交替した形式と交替していない形式の両方が混在していた。また、/-lAɣ/ に関しては交替した形式のみが記載されていたものの、boor-doɣ については別のキルギス語辞書である Judaxin (1965) では交替していない boor-loɣ が併記されていた。

### (5) Krippes (1998) 内の見出し語表記の内訳と例

接尾辞と語例の内訳		例（紙幅の都合上最大 3 例ずつのみ示す。）
a. /-lAɣ/	/d/ : 2 例	boor-doɣ “血のつながった親戚” ɖer-deɣ “同郷の者”
	/l/ : 0 例	
b. /-lIk/	/d/ : 23 例	asker-dik “軍役” bir-dik “団結” planetar-duk “惑星の”
	/l/ : 5 例	kanaattanar-luk “満足いく” talapker-lik “立候補” ɔmyr-lyk “永遠の”
c. /-IUU/	/d/ : 16 例	kar-duu “雪のある” sabuur-duu “我慢強い” ɖamɣur-duu “雨のある”
	/l/ : 6 例	kastar-luu “儉約的” kumar-luu “無謀な” aɣur-luu “馬をもつ”
	両方記載あり : 3 例	kajur-d/luu “徳のある” zar-d/luu “悲しい” ɔnɔr-d/lyy “才能のある”
d. /-lA/	/d/ : 12 例	kir-de-t “汚す” tor-do “繕う” dajar-da “準備する”
	/l/ : 11 例	kabar-la “知らせる” ɖabuur-la-n “苦しむ” naɣar-la-n “弱くなる”

注 4: d. /-lA/ は使役形接尾辞 /-t/、再帰形接尾辞 /-n/ などの態接尾辞が /-lA/ に接続したのものも含む。

調査 1 では Krippes (1998) から得た /r/ で終わる 70 の語幹を 4 名の母語話者に提示し、先の 5 つの接尾辞 (/lAɣ/, /lIk/, /IUU/, /lA/, /lAr/) が接続可能かどうか、また接続するとしたら接尾辞がどのように実現する

かを尋ねた（ただし /-IAʃ/ については一部未調査）。以下の (6) に母語話者の情報を示す。

(6) 第二発表者：女性、1978 年生まれ、ナルン市出身

A 氏：男性、1986 年生まれ、ナルン市出身

B 氏：男性、1981 年生まれ、ナルン市出身

C 氏：女性、1949 年生まれ、ビシュケク出身

調査は 2021 年 1 月より、全てオンラインで行った。第二発表者への調査は第一発表者が、A, B, C 氏への調査は第二発表者が行った。なお、今回の母語話者は全員キルギス北部出身であり、庄垣内 (1988: 1417) と Kirchner (1998: 344) によればキルギス北部方言を基礎としているのがキルギス標準語であることをここで述べておく。以下の (7) に各母語話者の調査結果を示し、観察結果を (8) に示す。

(7) i. 第二発表者

接尾辞と回答総数	/-IAʃ/: 2	/-IIk/: 38	/-IUU/: 38	/-IA/: 36	/-IAr/: 36
/l/ の実現					
/d/() 内数字はうち /l/ も聞くとコメントありの数	2 (2)	31 (2)	28	23	0
/l/ と /d/ を同程度に用いる。	0	0	0	1	0
/l/() 内数字はうち /d/ も聞くとコメントありの数	0	7 (2)	10 (4)	12 (2)	36☆

ii. A 氏

接尾辞と回答総数	/-IAʃ/: 未調査	/-IIk/: 33	/-IUU/: 49	/-IA/: 50	/-IAr/: 63
/l/ の実現					
/d/() 内数字はうち /l/ も聞くとコメントありの数		20 (2)	36 (4)	38 (5)	0
/l/ と /d/ を同程度に用いる。		1	0	0	0
/l/() 内数字はうち /d/ も聞くとコメントありの数		12 (5)	13 (4)	12 (3)	63☆

iii. B 氏

接尾辞と回答総数	/-IAʃ/: 2	/-IIk/: 41	/-IUU/: 48	/-IA/: 30	/-IAr/: 67
/l/ の実現					
/d/() 内数字はうち /l/ も聞くとコメントありの数	2 (2)	12 (2)	9 (4)	16 (2)	0
/l/ と /d/ を同程度に用いる。	0	0	0	0	0
/l/() 内数字はうち /d/ も聞くとコメントありの数	0	29 (19)	39 (31)	14 (7)	67☆

iv. C 氏

接尾辞と回答総数	/-IAʃ/: 未調査	/-IIk/: 32	/-IUU/: 49	/-IA/: 52	/-IAr/: 63
/l/ の実現					
/d/() 内数字はうち /l/ も聞くとコメントありの数		17 (2)	38 (8)	34 (7)	0
/l/ と /d/ を同程度に用いる。		1	1	6	0
/l/() 内数字はうち /d/ も聞くとコメントありの数		14 (5)	10 (5)	12 (6)	63☆

(8) 観察結果

a. (3) の接尾辞 (/IAʃ/, /Iik/, /IUU/, /IA/) に関して：(7) の ( ) 内数字、および「/l/ と /d/ を同程度に用いる。」に示すように、両方が許容されるものがあつた。また下の (9) に示すように話者間、話者内で交替の有無に差異がみられた。

b. /IAr/ に関して：全ての母語話者で全て /l/ で実現した (表中☆付きの数字)。

(9) a. 話者間の差異：話者によって交替の有無が異なる。

例	/asker-Iik/ “軍役”	第二発表者: /d/	A, C 氏: /l/
	/kabar-IUU/ “知らせのある”	第二発表者、B 氏: /l/	A, C 氏: /d/

b. 話者内の差異：同じ語幹であっても、接続する接尾辞によって交替の有無が異なる。

例	第二発表者 zar “苦しみ”	zar-luk, zar-duu
	A 氏 ømyr “寿命”	ømyr-dyk, ømyr-lyy
	B 氏 uuzgaar “寒さ”	uuzgaar-luu, uuzgaar-da
	C 氏 sabuur “我慢”	sabuur-luk, sabuur-da-n

(10) (8a) に対する本発表の解釈：/r/ における /l/ の交替は随意的である。

(8b) に対する本発表の解釈：交替がみられた (3) の接尾辞 (/IAʃ/, /Iik/, /IUU/, /IA/) は全て派生接尾辞であり、一方で交替がみられなかった複数形接尾辞 /IAr/ は曲用に関わる点で屈折的であることから /r/ における /l/ の交替は派生接尾辞でのみみられるといふことができる。

→総括：/r/ における /l/ の交替は、義務的ではなく随意的なものであり、かつ派生接尾辞にのみみられる (=4a)。

### 3. 調査2—接続先の種類と交替の有無に関して—

調査2では接尾辞接続先の形態構造の違いに着目する。特に、/r/ における /l/ の交替の有無に (11) のような何らかの形態論的情報が関連しているかを調査する。

(11) 日本語の漢語における /p/ の交替：語境界 (+) の有無による差異 (Itô and Mester, 1996: 34-35)

語境界なし：/haN-patu/ → haN-patsu “反発 (はんぱつ)”

語境界あり：/siN+patu-mei/ → jiN+hatsu-mei “新發明 (しんはつめい、\*しんぱつめい)”

調査2では /Iik/ についてのみ調査を行った。これは派生接尾辞の内、/Iik/ のみが複数の異なる形態構造に接続するためである。具体的には /Iik/ は以下の (12) に示す3つの形態構造をその接続先とする。(12b) の /-ker/ は“～する者”という意味の名詞を派生する接尾辞、(12c) の /-Ar/ は al kel-er “彼は来るだろう”のように動詞語幹に接続し非確定的な未来を表す。またこの「動詞語幹-Ar」という形式は kel-er ubakut “来たる時”のように分詞として名詞を修飾しうる。

(12) 接続先の種類と /Iik/ の接続した例

a. 名詞語根                      bir “一”                                      /bir-Iik/ “團結”

	baatur “英雄”	/baatur-llk/ “英雄的な（こと）”
b. 名詞語根-ker	ajla-ker “ずるい人”	/ajla-ker-llk/ “ずるい人のような（こと）”
	talap-ker “立候補者”	/talap-ker-llk/ “立候補”
c. 動词语幹-Ar	ajt- “言う”	/ajt-Ar-llk/ “言うべき（こと）”
	kylky keltir- “笑いをもたらず”	/kylky keltir-Ar-llk/ “笑いをもたらずような（こと）”

調査に当たっては、まず辞書（Krippes 1998、Judaxin 1965、Akmatalijev et.al. 2011）から (12b, c) に該当する語をそれぞれ 18 語、48 語抽出した。そして調査 1 と同様の調査を (6) の母語話者に対して行った。なお、調査 1 の /-llk/ のデータはその多くが (12a) に該当するものであったが、(12b, c) に該当するものがそれぞれ 5 例、1 例あったため、それらを抜き出したものを (12a) のデータとした。また抜き出した 5 例と 1 例をそれぞれ (12b, c) に加えた。このような再整理をした上での回答結果を以下に示す。

(13) i. 第二発表者

接続先の種類と回答総数	(12a) 語根-llk: 32	(12b) -ker-llk: 20	(12c) -Ar-llk: 48
/l/ の実現			
/d/() 内数字はうち /l/ も聞くとコメントありの数	28 (2)	8 (2)	0★
/l/ と /d/ を同程度に用いる。	0	0	0
/l/ () 内数字はうち /d/ も聞くとコメントありの数	4 (1)	12 (5)	48 (2)☆

ii. A 氏

接続先の種類と回答総数	(12a) 語根-llk: 27	(12b) -ker-llk: 22	(12c) -Ar-llk: 47
/l/ の実現			
/d/() 内数字はうち /l/ も聞くとコメントありの数	16 (2)	7 (2)	4 (2)★
/l/ と /d/ を同程度に用いる。	1	5	0
/l/ () 内数字はうち /d/ も聞くとコメントありの数	10 (3)	10 (8)	43 (13)☆

iii. B 氏

接続先の種類と回答総数	(12a) 語根-llk: 35	(12b) -ker-llk: 20	(12c) -Ar-llk: 47
/l/ の実現			
/d/() 内数字はうち /l/ も聞くとコメントありの数	11 (2)	1	2 (2)★
/l/ と /d/ を同程度に用いる。	0	2	1
/l/ () 内数字はうち /d/ も聞くとコメントありの数	24 (16)	17 (12)	44 (33)☆

iv. C 氏

接続先の種類と回答総数	(12a) 語根-llk: 26	(12b) -ker-llk: 21	(12c) -Ar-llk: 47
/l/ の実現			
/d/() 内数字はうち /l/ も聞くとコメントありの数	13 (2)	7	4 (1)★
/l/ と /d/ を同程度に用いる。	1	1	0
/l/ () 内数字はうち /d/ も聞くとコメントありの数	12 (3)	13 (3)	43 (5)☆

全ての話者に共通する特徴として、(12c) では /d/ の回答数が少なく、/l/ の回答数が多いという結果が得ら

れた（表中★☆部分）。これは統計的にも支持される。(12a, b, c) それぞれに関して、各話者の回答の偏り、および4名の回答の総和の偏りについてカイ2乗検定を行ったところ、(12c) でのみ各話者、および総和の両方で /d/ と /l/ の回答の間に有意な偏りが観察された（第二発表者： $\chi^2(2)=96.01, p<.01$ 、A氏： $\chi^2(2)=72.05, p<.01$ 、B氏： $\chi^2(2)=76.90, p<.01$ 、C氏： $\chi^2(2)=72.05, p<.01$ 、総和： $\chi^2(2)=315.55, p<.01$ ）。本発表ではこの結果を以下のように解釈する。

(14) 調査2の結果に対する本発表の解釈：/r/における /l/ の交替は随意的であるものの、派生接尾辞 /-lik/ をみる限り、「動詞語幹-Ar」が接続先である場合、交替は不活性化する（=(4b)）。

#### 4. 今後の課題

- ・ /-lAr/ と /-Ar/ は共に屈折接尾辞→「屈折接尾辞以降では /r/ の /l/ は交替しない」と一般化できるか？
- ・他の子音交替（対格接尾辞 nI→ dI/C-\_\_ 等）との差異、および他のチュルク諸語との差異も視野に入れた音韻文法モデルの構築。

#### 参考文献

- Akmatalijev, Abdylđazan et.al. (2011) *Kyrgyz Tilinin Sözdüğü*. Biškeek: Avrasya Press.
- Hebert, Raymond J. and Nicholas Poppe (1964) *Kirghiz Manual*. The Hague: Mouton.
- Itô, Junko and Armin Mester (1996) Stem and word in Sino-Japanese. In: T. Otake and A. Cutler (eds.) *Phonological Structure and Language Processing: Cross-Linguistic Studies*, 13-44. Berlin: Mouton de Gruyter
- Kara, Dávid Somfai (2008) *Kyrgyz*. München: Lincom Europa.
- Kasymova, Bella, Kurmanbek Toktonaliev and Asan Karybaev (1991). *Izučаем Kirgizskij Jazyk*. Frunze: Mektep.
- Kirchner, Mark (1998) Kyrgyz. In: Lars Johanson and Éva Á. Csató (eds.) *The Turkic Languages*, 344-356. London: Routledge.
- Krippes, Karl A. (1998) *Hippocrene Concise Dictionary Kyrgyz Kyrgyz-English English-Kyrgyz Glossary of Terms*. New York: Hippocrene Books.
- Landmann, Angelika (2011) *Kirgisisch Kruzgrammatik*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- 庄垣内正弘 (1988)「キルギス語」 亀井孝、河野六郎、千野栄一 他(編)『言語学大辞典』, 第1巻. 1416-1422. 東京: 三省堂.
- Judaxin, Konstantin K. (1965) *Kirgizsko-russkij slovar*. Moskva: Sovetskaja Enciklopedija.
- Zhu, Hanzhi (2018) Sonorant Restrictions in Kyrgyz. In: Wm. G. Bennett et al. (eds.) *Proceedings of the 35th West Coast Conference on Formal Linguistics*, 468-478. Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.

#### 謝辞

本発表の内容は、2020年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会（2021年3月20日、Zoomによるオンライン開催）における発表内容に大幅な加筆、修正を加え発展させたものである。大崎紀子氏をはじめとし、年次総会でコメントをくださった方々、および言語コンサルタントの方々に感謝申し上げます。また本研究は、文部科学省の卓越研究員事業、科研費（課題番号 21K12980, 21J40129, 18H03578）、およびAA研共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における情報構造と知識管理—音韻・形態統語・意味のインターフェース—」の支援を受けたものである。